

白山ふるさと文学賞

第四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

私と彼女の関係

鳥越中学校二年

川崎 かわさき

志穂 しほ

「おはようございます。みなさんの担任をする、神楽まゆみです。一年間よろしく願います。みなさんは今日から中学生です。その自覚をもって行動してください。それでは、出席番号の順に自己紹介をしてください。」

「はい。秋川香織です。運動が得意で、勉強は全体的に苦手です。よろしく願います。」

自己紹介が進んでいくのを、私は無表情で眺めていた。名前など覚える気はない。一度いじめられた事がある私は、他人を信用していない。名前を覚えて友達を作る気はなかった。だから、私の順番が来ても、

「水谷翠です。よろしく願います。」

笑顔をはりつけて、それだけ言うと、座った。

休み時間、周りはみんなグループを作っている中、私は一人で本を読んでいた。友達なんていない。一人が好きなんだし、何人も集まってもさわがしいだけなんだから。そう思っている私に友達なんてできるはずがなかった。

そして、初めての中間試験。みんな点をとろうと必死だ。低いなら低いで、笑ってるだけのくせに。そう思っても、表面上は話しかけてくる人を作り笑顔で答える。そうして、試験が終わった。順位がはり出される。みんな、私と順位を交互に見ていた。

「学年一位なんてすごい。私には無理だね。」

そんな中で、秋川さんが話しかけてきた。

「真面目に授業受ければできると思うけど。」

「私よく寝てるもんね。だから成績も悪いし。ってことでお願い。勉強教えて。水谷さんと仲良くなりたかったし、ちょうどいいよ。」

「…何で。」

こんなことを言う気はなかった。

「何でってどういうこと？」

聞いても意味が分かるわけではない。

「ごめん、何でもない。」

と言おうとした時、秋川さんが口を開いた。

「仲良くってこと？だったら…うーん。気になったから…かな。いつも一人でいるし、友達いないのかな、とか思ってた。それなら、私が友達になってあげようと思った。」

「なってあげる？上からだよ。別にいいけど。悪いけど、ならなくていいよ。」

何故かイラつき、気付いたらこう言っていた。

「友達になりたいと思うほど、興味もないし、信用してないから。まあこれ、秋川さんにたいしてだけじゃないけど。」

そう、皮肉気と言う。あーあ。ある程度うまくやっていたのに。視線を感じる。痛いほどに。それを全て無視して、教室を出た。私を非難する声に見送られながら。

次の日、教室へ入ると全員が私を見た。なんなのだろう。机を見た時意味がわかった。そこには暴言が書かれていた。体育の後には制服が切りさかれていた。その次の日には無視が始まった。そしていじめは、日を重ねるごとに、エスカレートしていった。全て、秋川さんを中心に、クラス全員で行っていた。

そんなある日、道徳の時間にいじめがテーマになった。いじめについての意見を発表しあう。次は秋川さんだ。何て言うだろう。

「私は、いじめはよくないと思います。いじめることで相手も自分も傷つくと思います。」

いじめている人が何言っているんだろう。本気で言ってるの。どうせ嘘でしょ。そんなことを思っているうちに私の番が来た。

「いじめは、誰もが悪いと分かっている、そして、どうしてもなくならないと思います。」

これは、私が本気で思っていることだった。全員の意見を聴くと先生は、こう言った。

「このクラスでいじめがおきています。誰が誰をとはいいません。ですが、一人一人がいじめについてよく考えてください。」

そこでチャイムがなって授業は終わった。みんなざわついている。

「あの、水谷さん。いじめてごめんなさい。」

一人がそう言ってきた。それをさかいに、どんどんよってきてあやまり始めた。はっきり言ってくるさい。どうせ、先生にばれたからあやまってるだけなんじゃないの。そう言うわけにはいかず、笑顔を顔にはりつける。

「別にいいよ。気にしてないし。」

それだけでみんなほつとして離れていく。嘘に決まってるじゃん。誰もうたがわないうことは、本気で悪いと思っただけよね。

本を読もうとした時、数人の女子と目があつた。秋川さんとその友達。私を睨んでいる。聞こえよがしに会話をしている。

「水谷さんつてうざくない。頭いいの鼻にかけてさ。私はあなた達とは違うんですよ。」

「ああ。それわかる。何様ですかって思う。」

今までに溜め込んだ感情が爆発した。

「あのさ。私がいつ鼻にかけた。いつそんな態度をとった。毎日毎日いじめてきて、何様ですかって思う？それ、私が言いたい。」

泣きそうと思った。私が、ではなく彼女達が、だ。いつの間にか休み時間も終わっていた。先生が入ってきたところで泣き始め、

「先生、水谷さんが悪口を言ってきました。」

と、訴えている。先に言ったのはそっちじゃん。まあどうせ私が悪くなるんでしょう。

「ろう下に聞こえたのでは、秋川さん達も悪口を言っているように聞こえましたが、違うんですか。」

だけど、先生はそう言っていた。予想がはずれた。彼女達も下を向いている。悔しそうに。

「この時間は自習にします。秋川さん達と、水谷さんは、来てください。」先生について今は使われていない教室に入る。

「秋川さん達はどうして水谷さんはいじめていたんですか。」

秋川さん達は答ええない。先生も分かっていたのだろう。今度は私に質問をしてきた。

「水谷さんは分かりますか。」

分かるけど、正直に言うともんどくさそう。

「すみません。分かりません。」

だから、こう答えるだけにした。

「そうですか。これ以上は聞きませんがあなた達はきちんと水谷さんにあやまりなさい。」

そう言っただけで先生は教室を出ていった。秋川さん達はきまずそうな顔をしている。だが、

「水谷さん。今までごめん。」

と言うと教室を出て行った。秋川さん以外が。秋川さんは、ずっと下を向いていた。だけど、顔を上げると、

「水谷さん、今までいじめて本当にごめんなさい。」

そう一息に言って頭を下げた。

「こんな事私が言えないけど。お願い。許してほしい。それで、友達になつてほしい。」

「何で、いじめてた人がそんな言葉言えるの。」

「言い訳にしか聞こえないと思うけど、私、臆病だから、私だけあやまつたら友達失いそうで。それで私が中心になっていじめてたんだ。許してなんて言っただけ無理だよ。」

「それぐらいで離れるなんて友達って言えないでしょ。ああ言ってる時点で秋川さんに友達なんていないんじゃない。それは、ただの上辺だけのつきあいに見える。」

「……うん。そうかもしれない。でも、私は友達だと思ってたから。そ

れに、一人がいやだった。いじめられるかと思ったから。」

いつのまにか、私は許す気になっていた。多分、彼女は嘘を言っていないように感じたから。みんなあやまつたら当然許されるだろうとどこかで思っているのに、彼女だけは許されないだろうと思っていたから。だから許す気になっていったんだろう。

「秋川さん。私がいじめられた事はもういいよ。それで、友達になろう。」
「えっ。それ本当。私、いじめてたんだよ。それも中心になって。本当にいいの。」

「うん、他の人と違って嘘をついてないように感じたから。だから、信じてあげると、思ったし。」

「よかった。友達になってもらえて。あのさ、それなら、名前で呼んでもいい？あと、私のこと、名前でもいいよ。…ダメかな。」

「別にいいけど。」

一気に打ち解けていた。そんな、この空気がとても心地好かった。いつのまにか、私は笑っていた。久しぶりに、心から。

それから数ヶ月がたった。彼女は、私にとって親友となっていた。私とは正反対の彼女は、だけどどこか似ていた。だから、親友になったのだと思う。

「おはよ、翠。何してんの？」

「香織おはよう。考え事。世の中って嘘ばかりだろうな。みんなだまして、だまされてるんだろうな。でも、それに気づかないから、嘘が真実になったりするのかなって。」

「ふーん。よく分かんない。それよりもさ、一限体育だよ。着替え行こ。」
笑いかけている香織に、笑い返ししながら、彼女には言わなかったことを、小さくつぶやく。

「私達の関係も嘘なのかもしれないって事もね。」

